日本ロッシーニ協会例会、2014 年 3 月 21 日、北沢タウンホール 3F ミーティングルーム

ロッシーニ《オテッロ》の変遷——1816 年ナポリ初演から 2012 年チューリヒ歌劇場まで

水谷 彰良

内容予告：

1816 年にナポリで初演されたロッシーニの《オテッロ》は、その後ハッピーエンド改作版が作られ、女性歌手が男装してオテッロを演じるなど、さまざまな形態での上演が行われました。そして 1890 年にいったん演目を外れ、1954 年に復活を遂げて現在に至っています。講演では約 2 世紀に及ぶ《オテッロ》の変遷を、19 世紀の視覚資料（舞台図、衣装、台本、楽譜）、20 世紀の上演例（1980 年パレルモと 1988 年ペーザロ ROF）、21 世紀の上演例（2007 年ペーザロと 2012 年チューリヒ）を通じて明らかにし、併せて 2012 年バルトリ主演のチューリヒ歌劇場上演の録画をダイジェストでご覧いただきます。（講師・記）

◎ロッシーニの《オテッロ》

ロッシーニ《オテッロ》はシェイクスピアの『オセロー』を直接の原典とせず、後述するデュシスのフランス語翻案その他に基づく台本に作曲家された。

註：シェイクスピアの原作、ヴェルディ作品と原作との異同、ロッシーニ作品における独自な部分はテキスト 3-4 頁の表、ロッシーニ《オテッロ》作品解説は 4-6 頁参照。

◎オペラでは描かれない原作の第 1 幕、オテッロとデズデーモナのなれそめと個々の性格

・イアーゴーは、オセローがキャシオーを副官にして自分を旗手の身分にしたことでオセローを恨んでいる。
・ロダリーゴーは彼が思いを寄せるデズデモーナがオセローと愛し合っていることが許せない。
・彼らはデズデモーナの父ブラバンショーに、「老いた黒い牡羊があなたの白い羊の上に乗っている」と告げ口する。
・議員たちの前でデズデモーナとの関係を問われたオセローは、彼女とのなれそめを話し、連れてこられたデズデモーナも「あの人は私の夫です」「彼の真の姿はその心にある」と言って結婚の許しを求める。トルコ艦隊がやって来るとの報せに、オセローは防衛を約束する。

★シェイクスピア『オセロー』：1965 年イギリス国立劇場（イングリッシュ・ナショナル・シアター）、ローレンス・オリヴィエ（オセロー） LD 廃盤 6:34

◎ロッシーニ《オテッロ》の音楽と特色

・オテッロはバリテノーレの役

註：初演歌手アンドレア・ノッツァーリ（Andrea Nozzari,1775～1832）はカストラートのジュゼッペ・アプリーレに師事した。バリテノーレの典型で、後のテノーレ・ディ・フォルツァ（力強いテノール）の先駆をなす力強い声の用法に特色恵まれていた。ロッシーニ作品はオテッロ、《アルミーダ》リナルド、《湖の女》ロドリーゴなど 9 役を創唱。

★N.2 オテッロのカヴァティーナ 1988 **年ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル上演、クリス・メリット（オテッロ） 放送映像** 6:58

・ロドリーゴはテノーレ・コントラルティーノの役

註：初演歌手ジョヴァンニ・ダヴィド（Giovanni David,1790-1864）はテノーレ・コントラルティーノの典型とされ、ファルセットも含めて 3 オクターヴの声域を具えていた。持っていた。《オテッロ》ロドリーゴのアリアは、彼のタイプの見本となるものである。

★N.3 ロドリーゴとイアーゴの二重唱 同前、ロックウェル・ブレイク（ロドリーゴ） 6:01

・ヒロイン、デズデーモナの登場アリアが無い。これは異例のことなので、その後の上演ではプリマ・ドンナが第 1 幕に自由に登場アリアを歌うことがあった。例：ジュディッタ・パスタは《湖の女》マルコムのアリアを挿入。
・写実的に描かれる舞台上でのヒロイン刺殺とオテッロの自害

註：当時の検閲では通例、オペラにおける舞台上の決闘、殺人、自殺は不可だった。

★シェイクスピア『オセロー』より 前記 6:40、**ロッシーニ《オテッロ》第 3 幕フィナーレ 前記、ジューン・アンダーソン（デズデーモナ）** 12:20

◎19 世紀における変遷と特殊な上演

・ローマにおけるハッピーエンド改作

教皇国家の検閲に抵触したことから、1820 年のローマ上演でハッピーエンドに改作された（ロッシーニが関与したかどうかは不明）。このハッピーエンド版はその後も幾つかの上演で用いられた。

★ロッシーニの伝記映画におけるハッピーエンド・フィナーレ 1:33

★ハッピーエンド版：《オテッロ》フィナーレ冒頭～《アルミーダ》の二重唱～《オテッロ》フィナーレの末尾～《リッチャルドとゾライデ》フィナーレ Opera Rara ORC18（CD3 **枚組。海外盤**） 11:05

・女性歌手が男装してオテッロを演じる上演

1829 年のボローニャ上演におけるジュディッタ・パスタが最初。後にマリブランも演じている。
ショパンのヴォイチェホフスキ宛、1831 年 12 月 12 日付の手紙——「ラ・マリブランは彼女の奇跡的な声で魅了する。彼女は容姿でも幻惑する！ 驚異中の驚異！」「彼女［シュレーダー=デフリーント］がデズデーモナ役を演じ、マリブラン夫

人がオテッロ役だった。マリブランが小柄でドイツ女がでかい！ ドイツ女がオテッロを窒息させたように見えたよ。この上演に出席するのは高くついた。この役ではぱっとしない真っ黒［黒塗り］のマリブランを見るために、全部の席が 24 フランなんだ。」
註：2000 年 7 月マルティーナ・フランカで女性ヴァージョンの上演が行われた（ライヴ CD は Dynamic CDS 369/1-2）。

・ムーア人でない白人のオテッロ
1819 年フィレンツェのペルゴラ劇場では、ニコラ・タッキナルディが黒塗りせずにオテッロを演じた。なお、1818 年から《オテッロ、またはヴェネツィアのアフリカ人（*Otello, ossia L'africano di Venezia*）》の題名で上演されることが多かった。

マヌエル・ガルシアのオテッロ

ジョヴァンニ・バッティスタ・ルビーニのオテッロ

ジルベール・デュプレのオテッロ

◎後のオペラなどへの影響
・第 2 幕フィナーレ冒頭の序奏とパセティックなシンコペーションの伴奏 ⇒メルカダンテ《ニトークリ》（1824 年）第 1 幕ミルテーオのシェーナほか　1:23
・柳の歌のハープ前奏 ⇒ベッリーニ《アデルソンとサルヴィーニ》（1825 年）ネリーのロマンツァほか　2:02
註：ドニゼッティ《劇場の都合と不都合》に柳の歌のパロディあり。
・ヴェルディの《マクベス》と《リゴレット》に聞く《オテッロ》の片鱗
例 1：柳の歌の前奏と《マクベス》第 4 幕レディー・マクベス夢遊の場の前奏　0:43
例 2：第 2 幕シェーナの前奏と《リゴレット》第 2 幕マントヴァ公爵のシェーナの前奏　0:51
例 3：第 2 幕オテッロとイアーゴの二重唱と《リゴレット》第 2 幕リゴレットとジルダの二重唱　0:46

◎映像に観る《オテッロ》（1980～2012 年）

・1980 年 3 月パレルモ、マッシモ劇場　演出：シルヴァーノ・ブッソッティ　オテッロ：フィリップ・ラングリッジ、デズデーモナ：マルゲリータ・リナルディ　放送映像　6:07／7:30　註：現代作曲家としても有名なブッソッティの演出で、背景画などややキッチュ。
・1988 年ペーザロ、ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル　演出：ピエル・ルイージ・ピッツィ　オテッロ：クリス・メリット、デズデーモナ：ジューン・アンダーソン　註：写実的な舞台。
・2007 年ペーザロ、ロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル　演出：ジャンカルロ・デル・モナコ　オテッロ：グレゴリー・クンデ、デズデーモナ：オルガ・ペレチャツコ、ロドリーゴ：フアン・ディエゴ・フローレス　ROF 資料映像　7:19　註：来日公演でも使用された演出と舞台に問題あり。
・2012 年チューリヒ歌劇場　演出：モーシュ・ライザー＆パトリス・コリエ　オテッロ：ジョン・オズボーン、デズデーモナ：チェチーリア・バルトリ、ロドリーゴ：ハビエル・カマレナ　註：モダン演出とピリオド楽器使用の革新的な《オテッロ》放送映像によるダイジェスト（1 時間 15 分）
第 1 幕より N.1 導入曲、N.2 オテッロのカヴァティーナ、N.4 デズデーモナとエミーリアの小二重唱、フィナーレ後半部　3:08／6:14／3:56／8:38
第 2 幕より N.7 オテッロとイアーゴの二重唱、N.8 ロドリーゴ、オテッロ、デズデーモナの三重唱、第 2 幕フィナーレ　7:35／11:40／8:20
第 3 幕よりゴンドラ漕ぎのカンツォーネ、柳の歌、デズデーモナとオテッロの二重唱～最終シェーナ　2:27／8:19／13:35

・近年の上演（2012 年と 2014 年［2013 年は上演なし］）とバルトリ
2012 年 2～3 月（6 回）　チューリヒ歌劇場　バルトリ主演
2012 年 10～11 月（3 回）　アルバカーキ（Albuquerque　アメリカ、ニューメキシコ）
2012 年 9～10 月（7 回）　ヒューストン（Opera in the Heights）　新演出
2014 年 2 月（6 回）　アントウェルペン　新演出　クンデ／ロメウ
2014 年 2～3 月（4 回）　ゲント　新演出　註：アントウェルペンと同じプロダクション
2014 年 4 月（6 回）　パリ、シャンゼリゼ劇場　バルトリ主演
2014 年 6 月（1 回）　ザルツブルク聖霊降臨祭音楽祭　バルトリ主演　註：前記シャンゼリゼ劇場のプロダクション
2014 年 7 月（3 回）　バクストン（イギリス）、バクストン・フェスティヴァル　演奏会形式

シェイクスピア『オセロー』	ヴェルディ《オテッロ》	ロッシーニ《オテッロ》
第１幕　ヴェネツィア 註：イヤーゴーとロダリーゴーの対話の一部はオペラ第１幕へ	註：ヴェルディ作品の**太字**はシェイクスピアと対応しない設定や追加	註：シェイクスピアとの対応と関係なしに、下線でヴェルディと対応しないロッシーニ独自の部分を示す
第２幕　キプロス島の港 (第１場) 人物間の対話、オセローの帰還 (第２場) 戦勝祝賀の布告のみ (第３場) オセローとキャシオー イアーゴーとキャシオー〈おおい、注いでくれ！〉 さらにモンターノ、オセロー、デズデモーナ ～イアーゴーとロダリーゴー	**第１幕**　キプロス島の海辺 (1) **嵐。戦闘を見守る人々の力強い合唱〈帆だ！帆だ！〉** (2) **勝利したオテッロの勝利宣言〈みな喜べ！〉** (3) ヤーゴがロドリーゴに、自分はオテッロを憎んでいると話す。 (4) 合唱〈喜びの炎〉 (5) **ヤーゴが酒を讃え、カッシオに勧めて酔わせる〈のどを潤そう〉**　続いて喧嘩騒ぎ (6) 喧嘩騒ぎを聞きつけオテッロ登場。**デズデーモナと二人きりになり、愛の二重唱〈暗い夜の深まりに〉(第１幕フィナーレ)**	**第１幕**　ヴェネツィア総督府の大広間 (1) 英雄オテッロの凱旋を、民衆が歓呼の声で迎える（No.1 導入曲） (2) オテッロは勝利の褒美として市民権を求め、これを許され喜ぶ（No.2 カヴァティーナ） (3) 恋敵の存在に動揺を隠せないロドリーゴに、イアーゴがオテッロを陥れる陰謀をもちかける（No.3 二重唱） (4) エルミーロの館の一室。オテッロに宛てた手紙を父に取り上げられ、ロドリーゴへの想いと誤解され悩むデズデーモナを、侍女エミーリアが慰める（No.4 小二重唱） (5) 大広間。婚礼の祝いに際して父からロドリーゴへの愛を誓うよう命じられたデズデーモナは絶望の淵に沈む。オテッロが現れて彼女との結婚の約束を明かす。ロドリーゴはオテッロに闘いを宣し、父は娘に呪いの言葉を浴びせる（No.5 合唱と第１幕フィナーレ）
第３幕　砦のオセロー宿所前 (第１場) キャシオー、道化、楽士 ～次にイアーゴー、エミリア (第２場) オセローとイアーゴの短い会話 (第３場) デズデモーナ、エミリア、キャシオー～オセローとイアーゴー～ハンカチを拾うエミリア (第４場) デズデモーナ、道化、エミリア ～オセローがデズデモーナにハンカチを見せろと迫る ～キャシオー、イアーゴー ～ビアンカとキャシオー	**第２幕**　城の中の広間 (1) 解任されたカッシオを慰めるふりをした**ヤーゴの信条告白〈非常な神への信仰〉** (2) ヤーゴがオテッロに、カッシオとロデリーゴの関係をにおわせる(ヤーゴとオテッロの二重唱) (3) 合唱〈あなたの眼差しの輝くところ〉 (4) デズデーモナはカッシオを許すようオテッロに頼む。苛立つオテッロは妻の手を邪険に払い、ハンカチが落ちる。拾ったエミーリアからヤーゴが奪う（四重唱） (5) **妻の不貞を疑い苦しむオテッロ。ヤーゴは疑いを確信に変えるためにカッシオの夢の話をでっち上げる〈ある夜のこと〉。そしてカッシオがハンカチを持つのを見たと言い、嫉妬に狂うオテッロはヤーゴと共に復讐を誓う（第２幕フィナーレ）**	**第２幕**　エルミーロの館の一室 (1) 言い寄るロドリーゴをデズデーモナが拒否する（No.6 アリア） (2) 家でひとり悶々とするオテッロの前にイアーゴが現れ、デズデーモナの手紙を見せてロドリーゴへの愛の告白と信じ込ませる。怒り狂って復讐を誓うオテッロ（No.7 シェーナと二重唱） (3) ロドリーゴが現れ、オテッロと決闘の雲行きになる。二人はデズデーモナの制止を無視して決闘の場へ赴く（No.8 三重唱） (4) デズデーモナはオテッロの無事を知って安心するが、父エルミーロに厳しく責められ、再び悲しみの底に突き落とされる（No.9 第２幕フィナーレ）
第４幕　キプロスの街中 (第１場) イアーゴーがハンカチのことでオセローに疑念を吹き込む ～キャシオーとの会話をオセローに聞かせる ～ビアンカ登場 ～ヴェネツィアの使者ロドヴィーコー、デズデモーナ、侍者たち	**第３幕**　城の広間 (1) 伝令によるヴェネツィア大使到着の報せ (2) デズデーモナが再びカッシオのとりなしを求める。疑いを強めたオテッロはハンカチを見せろと要求、**苦悩を深めて妻を呪う〈主よ！ あなたは私の頭上に〉** (3) ヤーゴが来て、オテッロにカッシオとの会話を盗み聞きさせる（愛人からハンカチを贈られた話）。**オテッロはデズデーモナの殺害を決める。** (4) 大使の一行が到着し、オテッロのヴェネツィア召還と、後任にカッシオが選ばれたとの命令書を渡す。 (5) **命令を受け容れるオテッロ。彼は怒りをデズデーモナに向け、彼女は絶望する。** (6) ヤーゴから妻殺しを急ぐよう唆された**オテッロは人々を去らせると苦悩のあまり卒倒、ヤーゴはその姿を冷たく見つめる（第３幕フィナーレ）**	

第 5 幕　キプロスの街中	第 4 幕　デズデーモナの寝室	第 3 幕　デズデーモナの寝室
(第 1 場) イアーゴーがキャシオーの足を刺して逃げる (第 2 場) 砦の一室[寝室] オセローが現れ、デズデモーナと激しい口論の末、首を絞める(または枕で口をふさぐ) エミリアが来てキャシオーがロダリーゴーを殺したと告げる。デズデモーナが息を吹き返し、「無実の罪で死ぬのです」といって息絶える。エミリアがイアーゴーの奸計を暴露して刺し殺される。絶望したオセローはイアーゴーを刺し、キャシオーからハンカチの一件を聞くと自害し、イアーゴーが連行される	(1) デズデーモナがエミーリアに不安を話す。 (2) **デズデーモナは、ひとりの乙女が柳の根元で息絶える哀歌を歌う〈柳の歌〉** (3) 神に祈りを捧げて眠る〈アヴェ・マリア〉 (4) オテッロが現れる。**目を覚ましたデズデーモナとオテッロの口論。オテッロは彼女の首を絞める。** (5) **エミーリアが来てカッシオの生存を教える。デズデーモナが息を吹き返して夫をかばい、死ぬ。エミーリアは女主人の無実を言明し、死ぬ前にロデリーゴがヤーゴの奸計を告白したと聞いてヤーゴが逃げ出す。** (6) **すべてを悟ったオテッロは絶望し、デズデーモナのなきがらに詫びて自害する。**	(1) 悲しみにくれるデズデーモナをエミーリアが慰める。 (2) ゴンドラ漕ぎの歌声 (3) デズデーモナは死を予感し、哀歌を歌う〈柳の歌〉 (4) 神に祈りを捧げて眠る〈祈り〉 (5) 隠し扉からオテッロ現れ、デズデーモナの寝言を勘違いして逆上。目を覚ましたデズデーモナとオテッロの口論。オテッロによる刺殺 (6) ルーチョが来て、イアーゴが陰謀を告白して殺されたと教える。オテッロへの誤解を解いた人々が二人の結婚を祝福に訪れ、オテッロは自害する（No.10 全）

《オテッロ、またはヴェネツィアのムーア人》作品解説　水谷 彰良

オテッロ、またはヴェネツィアのムーア人 *Otello, ossia Il moro di Venezia*

劇形式　3 幕のドランマ・ペル・ムジカ（dramma per musica in tre atti）
台本　フランチェスコ・ベリオ・ディ・サルサ（Francesco Berio di Salsa,1765-1820）
第 1 幕：全 13 景、第 2 幕：全 11 景、第 3 幕：全 5 景、イタリア語
原作　ウィリアム・シェイクスピア（William Shakespeare,1564-1616）の悲劇『オセロー（*Othello*）』（1604 年［註］）。但し、台本作者ベリオはシェイクスピアの原作を直接参照しておらず、デュシスによるフランス語訳やコゼンツァの改作台本から構成した［→解説］。シェイクスピア原作の基になっているのはジョヴァン・バッティスタ・ジラルディ・チンツィオ（Giovan Battista Giraldi Cinzio,1504-73）の『エカトンミーティ（*Ecatommiti*）』（1565 年）第 3 部第 7 話。
註：最古の上演記録は 1604 年 11 月 1 日であるが、これが初演かどうかは不明で、執筆年を 1602 年と推定する研究者もいる。初期の稿本の題名は『ヴェネツィアのムーア人オセローの悲劇（*The Tragedy of Othello, the Moor of Venice*）。なお、同作品は通例 5 幕とされているが、シェイクスピア時代の稿本には幕と場の区分を持たない。
作曲年　1816 年 9 月末～11 月末（同年 5 月中に一部試作。⇒解説）
初演　1816 年 12 月 4 日（水曜日）、フォンド劇場（Teatro del Fondo）、ナポリ
註：初版台本は Real [Reale] を伴い Real Teatro del Fondo と記載。
人物　①オテッロ Otello（テノール、A-d'''）……ヴェネツィアに仕えるムーア人［註］
註：moro［伊］は、古くは北西アフリカのイスラム教徒（主にベルベル人）を指し、8 世紀にイベリア半島を侵略した彼らが原住民から「モーロ」と呼ばれたことから「モロ」「モーロ」の表記も与えられる。けれどもシェイクスピア時代の Moor［英］は人種上のムーア人と共に肌の黒い「黒人」の意味でも使われ、シェイクスピアも後者に解したらしくオセローをイスラム教徒と思わせる台詞は原作に無い。ロッシーニのオペラ台本も同様だが、肌の色に起因する差別的な意味合い避けるためここでは「ムーア人」とする。
②デズデーモナ Desdemona（ソプラノ、b-c'''）……エルミーロの娘。オテッロと秘かに結婚の約束をしている
③エルミーロ Elmiro（バス、G-f'）……ヴェネツィアの貴族
④ロドリーゴ Rodrigo（テノール、d-d'''）……総督の息子。デズデーモナに恋しているが嫌われている
⑤イアーゴ Iago（テノール、c♯-b♭''）……オテッロの偽りの友で策略家
⑥エミーリア Emilia（ソプラノ、b-c'''）……デズデーモナの親友
⑦ルーチョ Lucio（テノール、f-f''）……オテッロの親友
⑧総督 Il Doge（テノール、e♭-f♯''）……ヴェネツィア総督
⑨ゴンドラ漕ぎ Gondoliero（テノール、d-g''）
他に、上院議員、オテッロの部下、デズデーモナを慕う貴婦人たち、民衆
初演者　①アンドレア・ノッツァーリ（Andrea Nozzari,1775-1832）
②イザベッラ・コルブラン（Isabella Colbran,1784-1845）
③ミケーレ・ベネデッティ（Michele Benedetti,1778-1828）
④ジョヴァンニ・ダヴィド（Giovanni David,1790-1864）

⑤ジュゼッペ・チッチマッラ（Giuseppe Ciccimarra,1790-1836）
⑥リーア・マンツィ（Maria Manzi,?-?）
⑦／⑨ニコラ・モッロ（Nicola Mollo,?-?）
⑧ガエターノ・キッツォーラ（Gaetano Chizzola,?-?）

管弦楽　2 フルート／2 ピッコロ、2 オーボエ、2 クラリネット、2 ファゴット、4 ホルン［序曲以外は 2 ホルン］、2 トランペット、3 トロンボーン、ティンパニ、雨音機と雷鳴機（Pioggia e Tuoni）、ハープ、弦楽合奏

演奏時間　序曲：約 7 分半　第 1 幕：約 64 分　第 2 幕：約 47 分　第 3 幕：約 37 分

自筆楽譜　ロッシーニ財団、ペーザロ

初版楽譜　B.Schott figli,Mainz,[1819]及び Breitkopf und Härtel,Leipzig,[1819-20]（ピアノ伴奏譜）

註：全集版（下記）の校註書は初版楽譜を 1819-20 年のブライトコプフ&ヘルテル版、2 番目を 1819-21 年の B.ショット息子版としたが、その後ロッシーニ財団はショット版の刊年を 1819 年と認定し、この二つのエディションを共に初版楽譜と位置づけている（fondo Lord St. Davids 目録）。

全集版　Ⅰ／19（Michael Collins 校訂,Fondazione Rossini,Pesaro,1994.）

構成　（全集版に基づく）

序曲［Sinfonia］：ニ長調、4／4 拍子、アンダンテ～アレグロ・ヴィヴァーチェ～ピュウ・モッソ

註：《イタリアのトルコ人》→《シジスモンド》と続いた序曲改作の決定版に該当。

【第 1 幕】

N.1 導入曲〈オテッロ万歳、勇者万歳 Viva Otello, viva il prode〉（合唱）

— 導入曲の後のレチタティーヴォ〈勇者たちよ、我らは勝利した Vincemmo, o prodi.〉（ロドリーゴ、オテッロ、イアーゴ、総督）

N.2 オテッロのカヴァティーナ〈ああ、そうです。あなたがたへ感じています Ah sì, per voi già sento〉（オテッロ、イアーゴ、合唱）

— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ〈ロドリーゴ！…／エルミーロ様！…ああ、お父上！Rodrigo! …Elmiro! … Ah padre mio!〉（ロドリーゴ、イアーゴ、エルミーロ）

N.3 ロドリーゴとイアーゴの二重唱〈いや、恐れてはならぬ No, non temer〉（ロドリーゴ、イアーゴ）

N.4 シェーナ〈お泣きになっても仕方ありません Inutile è quel pianto〉、デズデーモナとエミーリアの小二重唱〈お前の考えが Vorrei, che il tuo pensiero〉（デズデーモナ、エミーリア）

— 小二重唱の後のレチタティーヴォ〈ほら、見て！Ma che miro!〉（デズデーモナ、エミーリア、ロドリーゴ、イアーゴ、エルミーロ）

N.5 合唱と第 1 幕フィナーレ〈聖なるイメーネ ［結婚の神］！ 愛の神が導かれんことを Santo Imen! te guidi Amore〉（デズデーモナ、エミーリア、ロドリーゴ、オテッロ、エルミーロ、合唱）

【第 2 幕】

— レチタティーヴォ〈かまわないで／では無益なのですな Lasciami. È dunque vano〉（デズデーモナ、ロドリーゴ）

N.6 ロドリーゴのアリア〈なんですと！ ああ！ 何をおっしゃるのです！Che ascolto! ahimè! che dici!〉（ロドリーゴ）

— アリアの後のレチタティーヴォ〈私を捨てて！…行ってしまった！…M'abbandonò!…disparve!…〉（デズデーモナ、エミーリア）

N.7 シェーナ〈何をしたというのか！ 私をどこへ導いたのか Che feci!… ove mi trasse〉、オテッロとイアーゴの二重唱〈思い違いではない。私の恋敵へ Non m'inganno; al mio rivale〉（オテッロ、イアーゴ）

— 二重唱の後のレチタティーヴォ〈これほどまでになるとは E a tanto giunger puote〉（ロドリーゴ、オテッロ）

N.8 三重唱〈さあ、来るがいい、おまえの血で Ah vieni, nel tuo sangue〉（デズデーモナ、ロドリーゴ、オテッロ）

— 三重唱の後のレチタティーヴォ〈デズデーモナ！ なんてことでしょう！Desdemona! che veggo!〉（デズデーモナ、エミーリア）

N.9 第 2 幕フィナーレ〈なんという焦燥？ ああ！なんて苦しいの？Che smania? ahimè! che affanno?〉（デズデーモナ、エルミーロ、合唱）

【第 3 幕】

N.10 （第 3 幕全。ロッシーニは第 3 幕全体を一つのナンバーに集約しており、下記は全集版校訂者による便宜的区分）

レチタティーヴォ〈ああ！／苦しみに打ちひしがれて Ah! Dagli affanni oppressa〉（デズデーモナ、エミーリア）
ゴンドラ漕ぎのカンツォーネ〈これ以上の悲しみはない Nessun maggior dolore〉（ゴンドラ漕ぎ）
レチタティーヴォ〈ああ、なんて心に届くの Oh come infino al core〉（デズデーモナ、エミーリア）
柳の歌〈柳の根元に腰を下ろして Assisa appiè d'un salice〉（デズデーモナ）
祈り〈ああ、神様、眠りのうちに Deh calma, o ciel,nel sonno〉（デズデーモナ）
シェーナ〈気づかれずにここへ来た Eccomi giunto inosservato〉と、デズデーモナとオテッロの二重唱〈その一撃をやめないで Non arrestar il colpo…〉（デズデーモナ、オテッロ）
最終シェーナ〈何が聞こえるのだ！ 誰が叩いているのか？Che sento!…Chi batte?…〉（ルーチョ、ロドリーゴ、総督、オテッロ、エルミーロ、合唱）

物語　（台本には明確な時と場所の指定はなく、ヴェネツィアとの想定がされるのみ）

【第 1 幕】

ヴェネツィア総督府の大広間。総督、エルミーロ、上院議員たちが席に着いている。キプロスをトルコ軍から奪還した英雄オテッロの凱旋を、民衆が歓呼の声で迎える（N.1 導入曲）。アフリカ生まれのオテッロは勝利の褒美として市民権を求め、これを許され喜ぶが（N.2 オテッロのカヴァティーナ）、イアーゴとロドリーゴの嫉妬と怒りをかってしまう。一方、貴族エルミーロの娘デズデーモナに恋するロドリーゴは、恋敵の存在に動揺を隠せない。そこへつけ入ったイアーゴがオテッロを陥れる陰謀をもちかけ、復讐をそそのかす（N.3 ロドリーゴとイアーゴの二重唱）。

舞台変わってエルミーロの館の一室。秘かにオテッロと結婚の契りを結んでいるデズデーモナは、以前オテッロに宛てて書いた手紙を父に取り上げられ、ロドリーゴへの想いを綴ったものと誤解され悩んでいる。侍女エミーリアはデズデーモナを慰めようとするが、不安は去らない（N.4 シェーナ、デズデーモナとエミーリアの小二重唱）。そこへイアーゴ、ロドリーゴ、エルミーロが現れる。オテッロを嫌うエルミーロは娘をロドリーゴへ嫁がせようと決意する。だが父の意図を知らぬデズデーモナは、祝いの席でオテッロとの結婚が許されるのではと淡い期待を抱くのだった。

舞台は大広間となり、婚礼の祝いが行われようとしている。その場で父からロドリーゴへの愛を誓うよう命じられたデズデーモナは絶望の淵に沈むが、思いがけずオテッロが現れ、彼女と結婚の約束を交わしていると明かす。怒ったロドリーゴはオテッロとの闘いを宣し、父は娘に呪いの言葉を浴びせて激しく睨み合う（N.5 合唱と第 1 幕フィナーレ）。

【第 2 幕】

エルミーロの館の一室。ロドリーゴはデズデーモナに言い寄るものの、「私はもうあの人の妻です」ときっぱり拒絶され、嘆いて去る（N.6 ロドリーゴのアリア）。オテッロとの仲を割かれるのでは、と不安にかられるデズデーモナ。一方オテッロはデズデーモナの愛情へ不信を抱き、家でひとり悶々としている。そこへやって来たイアーゴがデズデーモナの手紙を見せ、ロドリーゴへの愛を告白したものと信じ込ませてしまう。怒り狂って復讐を誓うオテッロと、してやったりとほくそ笑むイアーゴ（N.7 シェーナ、オテッロとイアーゴの二重唱）。入れ替わりにロドリーゴが現れ、オテッロと決闘の雲行きに発展する刹那、デズデーモナが駆け込んできて制止しようとするが、2 人に怒りを向けられ、絶望のあまり失神して倒れる。オテッロとロドリーゴは彼女を置き去りにして決闘の場へと赴く（N.8 三重唱）。

エミーリアの介抱で意識を取り戻したデズデーモナはオテッロの身を案じるが、友人たちから無事を知らされ胸をなで下ろす。だが、父エルミーロは厳しく彼女を責め、罰が下されようと告げるので、再び悲しみのどん底に突き落とされる（N.9 第 2 幕フィナーレ）。

【第 3 幕】

デズデーモナの寝室。悲しみにくれる彼女をエミーリアが必死に慰めていると、ゴンドラ漕ぎの悲しげな歌声「みじめな境遇にあって、幸せの時を想いおこすより悲しきは無し」［註］が響いてくる。デズデーモナは自らの死を予感し、ひとりの乙女が悲しみの果てに柳の根元で息絶える哀歌 ［柳の歌］を歌い、神に祈りを捧げ［祈り］、眠りにつく。

隠し扉からランプと短剣を手にオテッロが現れる。不実の恋人を殺そうと決意しながらも優しい寝顔に逡巡していると、折悪しく彼女が寝言で口にした「いとしい御方」を、ロドリーゴのことと勘違いし、逆上してしまう。稲妻が光り、雷鳴が轟き、デズデーモナは目を覚ます。詰問するオテッロと身の潔白を訴えるデズデーモナの激しいやり取りが続く。ついに絶望した彼女は「私を殺して」と迫り、オテッロによって刺し殺される。そこへルーチョが来て、イアーゴが陰謀を告白して殺されたと教える。オテッロへの誤解を解いた人々が 2 人の結婚を祝福に訪れるが、オテッロは自らの過ちを悔い、自害して果てる（以上 N.10 第 3 幕全）。

註： ダンテ『神曲』地獄編、第 5 歌からの引用。

解説

【作品の成立】

《オテッロ、またはヴェネツィアのムーア人》（以下、《オテッロ》と略記）はロッシーニの作曲した 39 のオペラの 19 番目に当たり、ナポリ・デビュー作《イングランド女王エリザベッタ》（1815 年 10 月 4 日）から僅か 1 年 2 ヵ月後の作であるが、その間に《トルヴァルドとドルリスカ》《セビーリャの理髪師》《新聞》の 3 作が発表されている。ロッシーニが《イングランド女王エリザベッタ》に続いてサン・カルロ劇場に求められのが「バレエを伴う悲劇オペラ」だったことは、ナポリから母アンナに宛てた 1815 年 10 月 27 日付の手紙から明らかになる――「ローマからナポリに、二つのオペラを書きに戻ります。一つはフォンドまたはフィオレンティーニ劇場のためのブッファ、もう一つはサン・カルロにふさわしいバレエを付きの悲劇オペラです」[1]。同年 12 月 26 日にローマのヴァッレ劇場で《トルヴァルドとドルリスカ》、翌 1816 年 2 月 20 日に同地のアルジェンティーナ劇場で《セビーリャの理髪師》を初演したロッシーニは 3 月初めにナポリに戻ったが、不在の間にサン・カルロ劇場が焼失するアクシデントが起き（2 月 13 日の深夜に発生した火災により、翌 14 日未明に焼失）、これが原因でバレエを伴う大掛かりなオペラは見送られたようだ（以後、再建までの間、上演はもう一つの王立劇場であるフォンド劇場で行われることになる。なお、題材に《オテッロ》が選ばれた経緯や時期は不明である）。

ナポリに戻ったロッシーニは、舞台カンタータ《テーティとペレーオの結婚（*Le nozze di Teti,e di Peleo*）》を作曲し、4 月 24 日にフォンド劇場で初演した。続いて《オテッロ》に着手したことは、5 月 15 日頃に母に宛てた手紙に「いま作曲している《オッテッロ（*L'Ottello*）［ママ］》は壮麗で、きっとぼくの名声を高めてくれるでしょう」と述べたことでも判る[2]。同月 21 日には「ぼくは作曲しており、およそ 1 か月半後にぼくの《オッテッロ［ママ］》が上演されるでしょう」と記しているが[3]、なんらかの理由で上演予定は先延ばしとなり、6 月 18 日の母宛の手紙に「フィオレンティーニ劇場のために《新聞（*La Gazetta*［ママ］）》と題されたオペラ・ブッファ」を作曲していると告げている[4]。そして 8 月 27 日付の手紙の追伸で《新聞》の完成を報せるとともに、フォンド劇場で上演する作品に言及しているが、9 月 10 日の手紙では《新聞》を作曲中（オーケストレイションの段階を指すと思われる）とし、それが上演されたら「フォンド劇場のためのオペラ・セーリアを作曲します」と記している[5]。

《新聞》の初演は 1816 年 9 月 26 日に行われたが、フランチェスコ・ベリオ・ディ・サルサ（Francesco Berio di Salsa,1765-1820）が《オテッロ》の台本が完成したのはそれに先立つ 9 月 13 日であった（バルバーイアのジョヴァンニ・カラーファ宛ての書簡、同日付）[6]。正式に検閲を経て上演許可が下りたのは同月 25 日であることから、前記 5 月にロッシーニが作曲していたのはあらかじめベリオから受け取っていた〈柳の歌〉に関する話と思われる。そして当初ロッシーニは 10 月 10 日までに作曲を終えると約束していたが、11 月 5 日の段階で 1 曲のロマンツァ（〈柳の歌〉と推測）と 1 曲の二重唱しか仕上がっていなかったこともバルバーイアの同日付カラーファ宛書簡から明らかになる[7]。結局ロッシーニは 11 月いっぱいかけて全曲を完成しており、《オテッロ》が 3 週間で作曲されたという通説が誤りと判る。

【特色】

シェイクスピア原作とヴェルディ作品の間にあって、ベリオ台本はすこぶる評判が悪い。スタンダール、バイロン、ミュッセから酷評されたのである。バイロンはサミュエル・ロジャース宛の手紙で、「ロッシーニのオペラ《オテッロ》では『オセロー』が犠牲にされました。―音楽はいい、少し悲愴すぎますが―でも台本ときたら！―イアーゴとの大事な場面はすべて削除され―その代わりにとてつもなく馬鹿げたものが……」と記している（1818年 3月 3日付）[8]。

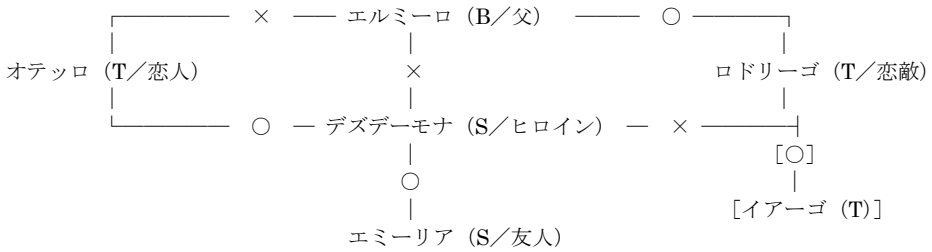
《オテッロ》初版楽譜（B.ショット息子、マインツ、1819年。筆者所蔵）

原作を知る誰もが台本に不満を漏らす。だが、オペラはそもそも原作文学とは別物であるし、ベリオがシェイクスピア原作を参照できなかったのであれば両者を同列に置くことはできない。『オセロー』はイタリアでは知られておらず、そのフランス語訳はP.F.ル・トゥルヌー（P.F. Le Tourneur,?-?）による散文訳（1776年）が最初で、劇台本は1798年と1814年に出版されたもののさして流布せず、演劇としての上演もイタリア国内では下記コゼンツァ訳による1813年ナポリの私演のみでオペラ化の前例も無い。

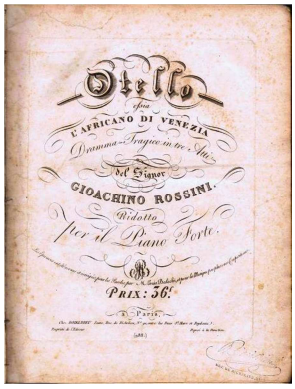
要するに、当時のイタリア人にとって『オセロー』は未知の作品だったのである。ベリオが参照し得たのも、1792年にパリで出版されたジャン=フランソワ・デュシス（Jean-François Ducis,1733-1816）による仏語訳と、そのイタリア語訳[9]、ジョヴァンニ・カルロ・コゼンツァ（Giovanni Carlo Cosanza,1765-1851）による未出版の改作脚本（初版は1826年ナポリ。1813年10月 7日に同地でアマチュア劇団が私的に上演）だけだった。それゆえ、ベリオ台本をシェイクスピア原作と比較するのはあまり意味がない[10]。むしろ伝統的なイタリア・オペラの規範に従って（あるいは反して）ベリオとロッシーニがデュシスとコゼンツァの改作台本をどうオペラ化したかが問題となろう。以下、主な点を挙げてみる。

1）5幕劇を 3幕に縮小し、最終幕にドラマの核心を集中させるためデュシスに倣って「柳の歌」を後にずらし、直前にコゼンツァ台本からデズデーモナの死を暗示する「声」をゴンドラ漕ぎの歌として採用、そのテキストにダンテ『神曲』地獄編の一節を引用した（これはロッシーニの発案といわれる）。
2）オテッロがデズデーモナを殺す激憤の動機づけに、寝言の一件をコゼンツァ台本から借用した（原作とデュシス訳には無い）。
3）コゼンツァ台本のハッピーエンドを退け、デュシスの悲劇的結末を採用。

その他いくつもの変更がある。例えば原作のハンカチが手紙になり、絞殺が刺殺に変わっている。どちらもデュシスに起因するが、フランスではハンカチは婦人にとって下着の一部、絞殺は下品な殺し方と見なされたようだ。第3幕に限って言えば、ベリオは二つの翻案から巧みに再構成し、ロッシーニの音楽が劇的緊張を保持するよう助けている。登場人物とその関係も、次のように纏められている（○は協調関係、×は敵対関係）。



シェイクスピアの原作では、策略家イアーゴー［ヤーゴ］の存在感がことのほか大きい。周囲への羨望と憎悪からデズデモーナを中傷し、オセローを嫉妬の地獄に陥れ、忠実な副官と妻を殺させるのだから真の主人公を悪の化身イアーゴーとさえ解釈できるのだが、ロッシーニ作品ではイアーゴが周辺人物に追いやられ、夫に貞節を疑われて死をもってしか無実を証すことができないデズデーモナの苦悩にスポットが当てられている。これは当時サン・カルロ劇場のプリマ・ドンナとしてイザベッラ・コルブランが君臨し、彼女を中心とした作劇を求められたためでもある。それゆえ劇の主役がオテッロでありながらも音楽的にはデズデーモナを核にした人間関係となり、彼女はシェイクスピア原作よりも遙かに高貴で誇りある女性として描かれるのである（オペラでは絶望の末に「私を殺して」と求めて刺殺されるが、原作では「殺さないで。今夜だけ生かしといて！」と抗ったあげくに女郎呼ばわりされ、絞殺もしくは枕で口を塞がれて窒息死させられる）。



フランス初版譜（ボワエルデュー・ジュンヌ、パリ、1820-21年。筆者所蔵）

さらに重要な点は、このオペラがオテッロの自害ではなく、女主人公の死に悲劇の最大の焦点を当てたことである。それをできる限り劇的かつ悲愴に表現することはロッシーニ以前には考えられぬことであり、オペラの歴史を塗り替える分岐点となっている。だが、これは当時の観客にはあまりに残酷すぎると不評をかい、ロッシーニはローマ再演用にハッピーエンド改作を行っている（下記上演史参照）。そうした行為を「ドラマ音痴」と批判する者もいるが、作曲者のヴィジョンが常に「崇高な女性の死」という悲劇的結末にあったことは、《マオメット2世》（1820年）がヒロインの自害をもって劇的に幕を閉じたことでも明らである（これも後にハッピーエンド版が作られた）。

旧作からの転用や借用は序曲（シンフォニーア）が《シジスモンド》序曲（1814年。《イタリアのトルコ人》序曲の素材の再使用を含む）の改作であることを除けば僅かで、デズデーモナとエミーリアの小二重唱（N.4）の主題が《パルミラのアウレリアーノ》（1813年）第2幕ゼノビアとアウレリアーノの二重唱、オテッロとイアーゴの二重唱（N.8）のカバレッタが《トルヴァルドとドルリスカ》（1815年）第2幕オルドウ公爵のアリアの転用改作に当たるにすぎない。第3幕のデズデーモナとオ

テッロの二重唱の管弦楽には《セビーリャの理髪師》第 1 幕ドン・バジーリオのアリア〈中傷はそよ風です〉のモティーフも使われ、その点は後の上演で問題にされることになる[11]。けれどもそれを捉えて非難するのは一種の揚げ足取りでしかなく、今日《オテッロ》を聴く私たちがその部分でバジーリオのアリアを想起するとは考えにくい。

一個の作品としての《オテッロ》はオペラ・セーリアのジャンルにおける紛れもない名作であり、第 2 幕フィナーレから第 3 幕フィナーレに到る息詰まる迫力とドラマティックな音楽――詩人ハイネはそれを「光り輝く花を噴き上げるヴェスヴィオ火山」と書いた（『思索と着想』）――を聴き、それが 1816 年に作曲されたこと（ヴェルディもワーグナーも 3 歳だった！）を考え併せると、ロッシーニはロマン主義オペラの先駆者として時代と苦闘したドラマティストだったと再認識させられる。それゆえ《オテッロ》は、真の 19 世紀オペラの誕生を告げる記念碑的作品と言っても間違いではないのではあるまいか。

【上演史】

《オテッロ》の初演は 1816 年 12 月 4 日にナポリのフォンド劇場で行われた。本来ならサン・カルロ劇場で行われるべきものだが、同劇場が火災で焼失したための措置で、上演そのものはサン・カルロのメンバーが行った。当時としては異例の悲劇的結末を備えていたにもかかわらず、初演は大成功であった（12 月 11 日付『両シチーリア王国新聞』が作品と演奏者を絶賛している）。

その後ロッシーニは 1819-20 年謝肉祭ローマのアルジェンティーナ劇場上演に際して、検閲に配慮したハッピーエンド改作ならびに歌手のための改変（アリアのカットや差し替え）を行った。中でも興味深いのがハッピーエンド版の第 3 幕で、《アルミーダ》（1817 年）第 1 幕アルミーダとリナルドの二重唱〈Amor! Possente nume!〉（N.5）をオテッロとデズデーモナの愛のデュエットとし、《リッチャルドとゾライデ》（1818 年）のフィナーレを改作転用している[12]。また 1824 年のロンドン上演と 1824～27 年のパリ上演でもロッシーニの関与もしくは許可による楽曲変更があるが、歌手に応じたカットや差し替えは一般的に行われており、ローマ上演での改作とは本質を異にする。

《オテッロ》はロッシーニのオペラ・セーリアの中でも際立って高い人気を得、たちまちヨーロッパ中の劇場に流布した。R.M.マルヴィンによれば、初演から 19 世紀最後の上演となる 1890 年までの 75 年間に、世界 26 カ国 87 都市で約 290 回舞台にかけられたという[13]。再演数を含めれば、上演回数は 1000 回を越えるだろう（ちなみにパリのイタリア劇場だけで、1819 年から 11 年間に 128 回も上演された）。

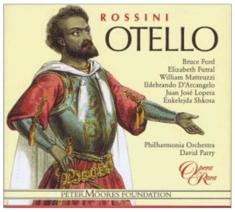
現代の復活上演は 1954 年 11 月 23 日ニューヨークのタウンホールで演奏会形式によって行われ、舞台での蘇演は 1961 年ロンドンのセイント・パンクラス・タウン・ホールでなされた。その後世界の 15 以上の都市で上演されているが、19 世紀上演版の省略を含んでおり、批判校訂版による初上演は 1988 年 8 月 16 日、ペーザロのロッシーニ・オペラ・フェスティヴァルで行われた（指揮：ジョン・プリチャード、演出：ピエル・ルイージ・ピッツィ、デズデーモナ：ジューン・アンダーソン）。日本初演は東京オペラ・プロデュースが 1989 年 6 月に邦語で行い（東京グローブ座、指揮：星出豊、演出：出口典雄、デズデーモナ：林ひろみ）、1996 年 4 月 18 日にはサントリーホール 10 周年記念公演として、批判校訂版による上演も行われた（指揮／演出：グスタフ・クーン、デズデーモナ：ダニエラ・ロンギ）。

推薦ディスク

《オテッロ》全曲　Opera Rara ORC18（CD3 枚組。海外盤）

デイヴィッド・パリー指揮フィルハーモニア管弦楽団、ジェフリー・ミッチェル合唱団 オテッロ：ブルース・フォード、デズデーモナ：エリザベス・フトラル、ロドリーゴ：ウィリアム・マッテウッツィ、イアーゴ：フアン・ホセ・ロペラほか

註：補遺としてハッピーエンド版の第 3 幕その他を収録。



---

[1] Gioachino Rossini.,*Lettere e documenti,IIIa:Lettere ai genitori.18 febbraio 1812 - 22 giugno 1830*, a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni,Pesaro Fondazione Rossini,2004.,pp.104-105.[書簡 IIIa.57] その決定が遅くとも 10 月 18 日になされていたことは、バルバーイアのジョヴァンニ・カラーファ宛の同日付書簡からも明らか（Gioachino Rossini.,*Lettere e documenti.,vol.I.*,29 *febbraio 1792 - 17 marzo 1822.*,a cura di Bruno Cagli e Sergio Ragni.,Pesaro,1992.,pp.110-111.[書簡 51]）。

[2] *Lettere e documenti,IIIa.*,pp.132-133.[書簡 IIIa.72]

[3] Ibid.,pp.134-135.[書簡 IIIa.73]

[4] Ibid.,pp.136-137.[書簡 IIIa.74]

[5] Ibid.,pp.140-144.[書簡 IIIa.77 及び 78]

[6] *Lettere e documenti,I.*,p.177.[書簡 83]

[7] Ibid.,pp.184-187.[書簡 88] 及び全集版 I ／19《オテッロ》序文 p.XXV.

[8] 全集版《オテッロ》序文 p.XXVII.に引用

[9] チェレスティーノ・マッスッコ（Celestino Massucco,1750 頃-1830）訳。1800 年にジェノヴァで出版。

[10] ベリオが参照可能なのは次の六つであるが、3、4、5 だけが使用されたらしい（全集版序文 p.XXX.）。
1）シェイクスピア原作　2）ル・トゥルヌーの散文訳（1776 年）　3）デュシスのフランス訳（1792 年）　4）マッスッコによるデュシス本のイタリア語訳（1800 年）　5）コゼンツァの改作脚本（1813 年）　6）M.レオーニによるシェイクスピア原作のイタリア語訳（1814 年）　詳しくは全集版序文とロッシーニ財団によるリブレット集（I Libretti di Rossini 3〈Otello〉,1996.）所収のレナート・ラッファエッリ論文を参照されたい。

[11] これについては全集版《オテッロ》序文 pp.XXXIII-XXXIV.を参照されたい。

[12] 詳細は全集版《オテッロ》序文 pp.XXXVI-XXXVII.を参照されたい。なお、ハッピーエンド版第 3 幕の録音は本稿末尾の推薦ディスクに聴くことができる。

[13] Roberta Montemorra Marvin.,*Il libretto di Berio per l'Otello di Rossini.*, [in Bollettino del centro rossiniano di studi,Anno XXXI, 1991.,n.1-3.],p.55.